

日本の原風景

大分



国土交通省九州地方整備局
大分河川国道事務所長

谷村 昌史

1. はじめに

「隣から見た北海道の原稿を…」と頼まれたわけですが、こちらはもちろん頼んだ方も「とても隣じゃないよな…」と思いつつ、私でよければ、と快諾させていただいたところです。依頼の趣旨と一寸違いかもしれませんが、大分の紹介をさせていただき、北海道の読者の皆様の参考や刺激になれば、という思いで文章を書かせていただきます。

大分へは、平成20年8月1日に釧路開建釧路道路事務所から異動になりました。釧路におけるその日の気温は17度。釧路で辞令を頂いた後、飛行機を乗り継ぎ、その日の夕方に大分に入ったわけですが、

そこから連日34、5度。もう倒れそうでした、実際にある開通式で舗装道路の上に立っていたら軽い脱水症状になり本当に危なかったこともありました。21年度は、20年度ほど暑さが厳しくなかったこともあり、比較的（決して楽ではなかったですけど）なんとかしのげました。しかし、本当に厳しいのは冬でした。なにせ、家の暖房がファンヒーターとエアコンなものですから、部屋が寒いし空気が悪い。家の中を温める北海道と環境が全く違う。夏はバテましたが、冬は2度ほど内科の世話になりました。これが発行されるのは2月頃と聞いていますが、その頃の体調はどうなっているやら。

さて、大分へは釧路に引き続き単身赴任です。ここまで遠いと帰るのは正月、GW、お盆等まとまって休める時くらいです。週末に帰る、なんて発想にはなりません。もっとも、事務所長だと、結構いろいろな行事に顔を出すことが多く、帰りたくても帰れない。時間のある週末は、県内外を現地調達した中古の軽自動車でウロウロしています。

2. 大分の紹介

いくつか思いつくままに、大分について紹介させていただきます。

●「大分」という地名の由来は、諸説あるようですが「多き田」が転じている、

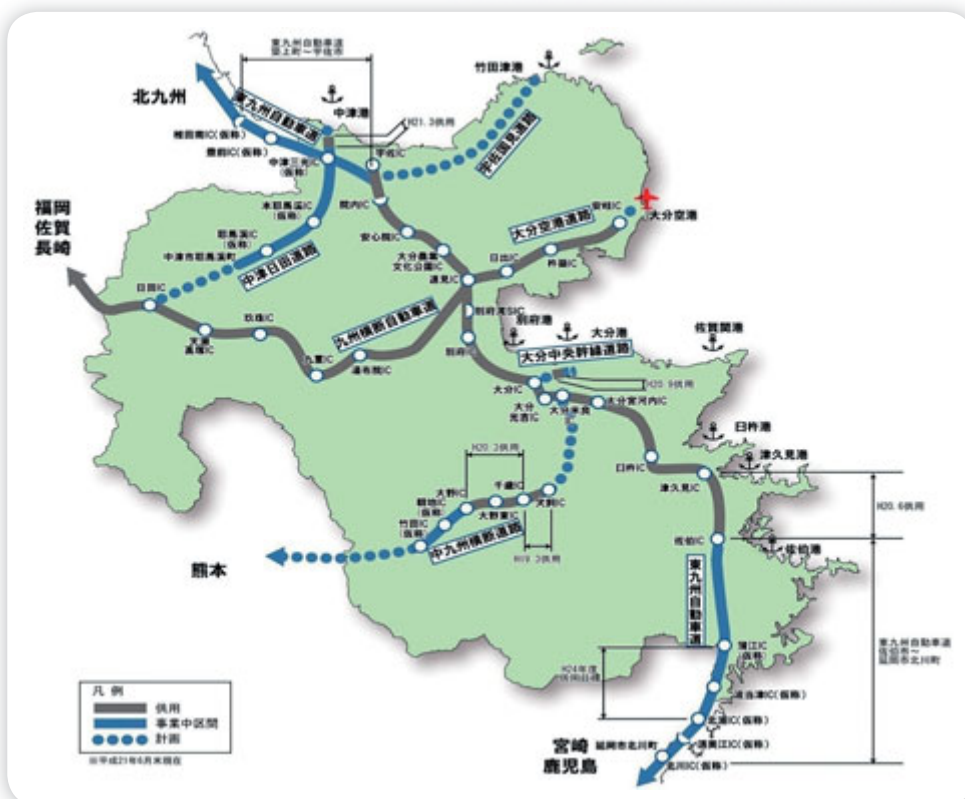


図-1 大分県の高速道路網の整備状況（出典：おおいの道路網構想21）

というのが一番有力なようです。たしかに広大な印象は持ちませんが、むしろ狭いところに張り付くような印象です。

●人口は約120万人。県庁所在地である大分市が約47万人、隣の別府市が約12万人で、両市を合わせて約半分を占めます。

●面積は約6,400km²。空知支庁よりもやや小さい、というところです。

●大分と言えば温泉が思い浮かぶでしょうか。大分県のHPによると、温泉源泉数（28,154孔のうち5,093孔）、温泉湧出量（2,778kl/分のうち316kl/分）ともに

日本一だそうです。別府、由布院が有名なところですが、温泉街があちらこちらにあります。北海道と違い、大きなホテルは少なく、小さな旅館が集まって温泉街を作っている事が多いです。また共同浴場も多く、浴衣姿で外湯に入る、なんていう光景も見ることができます。

●平成の大合併で市町村数が激減。2004年には58あった市町村数が、今は18になっています。これは九州の中でも最も少なく、全国的にも少ない数です。首長さんと話をすると、合併により出来るようになったこともあるようですが、どこも一体感を出すのに苦労されているようでした。北海道で合併が進んでいないことが改めてわかるような気がします。北海道は都市間距離が長すぎます。

●最後に道路事情ですが、北海道同様、高速道路網がまだまだ整備途上です（図-1、出典「おおいたの道構想21」）。私が北海道にいた時、宮崎県の東国原知事がよく「東九州自動車道の整備を」と言われていたのを、よく耳にしました。大分と宮崎が高速道で結ばれていなく車だと4時間かかります。熊本までも3時間。北海道の大きさのたとえで、九州プラス四国の1.3倍、という表現を使いますが、こちらに来て、この都市間の時間距離には驚きました。



写真-1 竹田市の竹楽（竹灯籠）

3. 風景など

よく、北海道で知り合いやお客さんを案内すると「外国みたいな風景」と言われました。今それを実感します。北海道の光景は、山や丘陵、水平線などがドーンと広がる「見渡す風景」が多いように感じます。大分の光景は、全くその逆で狭い所に棚田と人の暮らしのたたずまいを感じます。これが「日本の原風景」なのかな、とも思います。まんが日本昔話の常田富士男さんや市原悦子さんのナレーションが聞こえるのでは、と思うほど私にとっては新鮮でした。そして気のせいかもしれませんが、「見下ろす風景」が多いように感じます。10年以上前ですが当時の近畿地建兵庫国道時代、神戸だけではなく淡路島や播磨地方もまわりましたが、これほどの新鮮さは感じませんでした。

大分から熊本に向けて県道11号別府一の宮線という道路があります、通称「やまなみハイウェイ」。九州随一のドライブルートと呼んで良いでしょう。別府から由布院を通過し、由布岳、くじゅう連山を間近に見ながら、阿蘇に入るルートです。平成18年に日本風景街道戦略会議が2箇所視察に訪れました。1箇所は東オホーツク。もう1箇所がこのやま



写真-2 竹田市の姫だるまの制作工房

なみハイウェイでした。

地域の方と話をすると、「風景」に対するこだわりが大きいです。こちらでは「野焼き」というものを行っています。「なぜ、こんな手間暇間かかる事をやるのか？」と尋ねたところ、答えは「昔からやっているから」というものでした。こちらの草原は何百年もの間、人々が野焼きを行って人工的に作ってきたものなのです。野焼きによってダニなど人畜に有害な虫を駆除します。野焼きをやめると木が生い茂り草原はなくなるとのことです。また、それでも野焼きがあまりやられなくなり、来なくなった鳥もあるそうです、風景や草原の美しさは野焼きによって保たれています。しかし、野焼きは大変な作業で担い手が不足しています。21年の春には不幸にも死亡事故が発生しました。深刻な問題です。

もうひとつ「何？それ？」と思った事があります。地域の方が「風景が地盤沈下している」と言うのです。どういうことかということ、木が伸びて風景が徐々に埋もれたものに変化している、というのです。木を切る、というのは手続きのにも金銭的にも大変なことです。北海道の景色はいかがでしょうか？ 雄大

な自然は10年後も20年後も同じでしょうか？

戦略会議の視察以降、風景活動の取り組みを行っている団体では、案内看板の集約など、北海道と共通する取り組みも行ってはいますが、議論を始めると、野焼きなど風景を維持するためにどうするか、何をすべきか、という話にたどりつくことが多いです。

もうひとつ、イベント系ですが、北海道と似たように対照的な取り組みを紹介します。北海道では小樽をはじめとして「アイスクャンドル」が各地の冬の名物になってきています。こちらでは

「竹灯籠」が11月頃に各地で行われます。大分は小藩分立で城下町が多いのですが、城下町の情緒とロウソクの灯りがとても合います。この竹灯籠もそれほど長い歴史があるわけではなく、竹が増えて困っているところを逆手にとって地域おこしの取り組みにしたようです。写真は、竹田市で行われた「竹楽（地域によってイベント名は変わる、写真-1）」で撮ってもらったものです（良い写真は「竹田市 竹楽」で検索したHPを見て下さい）。ちょっと話が横道にそれますが、この竹田市、滝廉太郎の荒城の月のモデルである岡城址おかじょうしのある城下町なのですが、意外なところで北海道とのつながりがありました。北海道発の人気番組「水曜どうでしょう」でこの名物である「姫だるま」を紹介。また、ディレクターが、この竹田市を「日本で一番素敵な街」と言われているらしく、その番組の視聴者が、「姫だるま」の制作工房（写真-2、右側にある日本地図に来訪者がどこから来たかピンを刺していました）に多数訪れています。もちろん、北海道からも多数。ちなみに大分でも、「水曜どうでしょう」が視れるようになっています。

4. 地域の土木業界の取り組み

話がガラリと変わります。この冊子の読者層は、北海道の土木技術者が中心かと思います。大分県は人口約120万、建設会社もコンサルタントも北海道全体と比べれば規模も実力も比べることができるものではありませんが、結構頑張っているぞ！という事を紹介させていただきます。

1つめは、土木学会田中賞です。管内の九重町では地域振興を目的に歩行者用の吊橋「九重“夢”大吊橋（写真-3）」を渓谷に作り、これが作品賞を受賞しました。やまなみハイウェイ沿線でもあり紅葉時期はもちろん年中多数の観光客が訪れます（先日、オープンから3年足らずで来場者が500万人を突破）。ちなみに、ここも「見下ろす風景」です。この橋の設計を地元のコンサルタントが行いました。土木学会誌を見て田中賞の受賞と設計会社を知ったのですが、直轄の仕事もそれほど数多く行っ



写真-3 九重町“夢”大吊橋（歩行者用吊橋）

ていない会社なので驚きました。大手コンサルからUターンした技術者が中心になって設計したそうですが、それでも会社として実施したわけですからたいしたものでもあります。

もう1つは、大分県地域環境コンソーシアム（O-REC）を紹介させていただきます。地域の建設コンサルタントや建設会社で構成している団体です。この団体では、今、トンネルを中心に、維持管理技術を研究しています。大分県は日本一トンネルの多い県です。冒頭で紹介した地形的な特徴のせいか、確かにあちこち走っていて、よくトンネルに遭遇します。最新の道路統計年報によると、全国のトンネルが9,294箇所ある中、大分県内に520箇所のトンネルがあります。どうしても大手の会社を実施する検査や補修を何とか地域の会社で出来るように、という意欲です。今後、トンネルに限らず他の維持管理についても活動を広げたいと考えています。北海道と比べ、研究機関や大学等も乏しく、北海道土木技術会なんかと比べると極めて小さな団体ではありますが、大分なりの規模で身の丈よりやや背伸びしようとしています。限られた投資と、厳しい競争環境の中、このような取り組みはとても大事と考えます。

5. おわりに

道路の紹介なのか観光の紹介なのかわからないような文章になってしまいました。大分と北海道は、気候、風土、文化全く違うのですが、豊かな農水産物、温泉、風景…、そしてキャンドルなど、似たものをウリにしています。私がこちらに来て、いろいろ感心したり、感動しています。大分に来て、改めて北海道の良さを認識しながら、道路整備や地域づくりに貢献できれば、と考えています。また、本編ではあまり触れませんでした。地方で仕事をしている土木技術者の悩みも似たものがありました。この辺も、一緒に悩み、行動しながら良好な社会資本整備につながればと考えています。

こちらでは、北海道の人と話をする機会が殆どありませんが、いつか皆様と会う事がありましたら、その時また話させていただきます。